

耕作放棄地で栽培、発電

つぎがくる地域共生社会

農地に降り注ぐ太陽光の恵みを循環させ、コミュニティを再生する。こんな模索を続ける地域がある。人口減少と気候変動という時代の課題に直面し、「脱炭素社会」の実現に取り組む農家や移住者の活動を追った。

再生可能エネルギー

千葉県北東部、田畑が広がる農地使用の規制を緩和し、千葉市の飯塚地区。畑で普及に乗り出している。に立つ約3本の支柱の上に太陽光パネルがずらりと並ぶ。細長いパネルは間隔を空けて設置され、差し込む日光を浴びて力強く伸びた大豆の茎には、ふっくらと

一切り札

「この農村地区は約40年前に切り開いたやせた土地が多く、採算性や後継ぎの問題から、次第に耕作放棄地が増えた」。事業を展開する地元企業「市民エネルギーちば」共同代表取締役の榎さん(70)はそう話

「この農村地区は約40年前に切り開いたやせた土地が多く、採算性や後継ぎの問題から、次第に耕作放棄地が増えた」。事業を展開する地元企業「市民エネルギーちば」共同代表取締役の榎さん(70)はそう話

分かち合おうむらびづくり

投資

「市民エネルギーちば」のソーラーシェアリングを中心とする地域再生には、移住者の存在が欠かせない。農業と発電で自立性を高め「分散型社会」への歩みを支える。

分散型社会のひな型に



千葉県飯塚市に移住して農業をする越智雅紀さん(左)と青山完さん(右)

15年に引越してき卵農家に転身。スリトル・ベースの経い、子ども2人は地学校と保育所に通う自身も移住者である人の高坂勝さん(51)を呼び込み、食料をつくる地域活性化は、中型から分散型社会な型だ」と語る。

出と畑の荒廃を見つめる中、参加した勉強会で農業と発電を両立できると知り、当時、全国でも導入例は後英夫さん(70)は「一体的に維持管理の瀬戸際でも、もろ手を挙げて畑を託した。地域の景色が様変わりした。

2014年に創業し、出家らによる合同会社「スリトル・ベース」だ。農業や化学肥料を使わずに大豆のほか小豆、麦を有機栽培し、みそやビールなども作り出している。現在は出力千ワットの大豆のほかに小豆、麦を有機栽培し、みそやビールなども作り出している。現在は出力千ワットの大豆のほかに小豆、麦を有機栽培し、みそやビールなども作り出している。



千葉県飯塚市、東京都心から約70キロ東に位置し、太平洋沿いの九十九里浜に面する。2000年に旧八日市場市と旧野栄町が合併した。21年9月末時点の人口は約3万5千人。基幹産業は農業で、日本有数の植木の生産地として知られる。



頭上に細長いソーラーパネルが並び大豆畑で談笑する「市民エネルギーちば」共同代表取締役の榎茂雄さん(右)と、NPO法人「SOSAプロジェクト」の高坂勝さん(左)は9月、千葉県飯塚市

ソーラーシェアリングの仕組み



太陽光パネルの隙間に大豆を育てる。発電と栽培が二つの収入源になる。